「鉄道博物館」を訪ねて

熊　　博　毅

2007年10月14日の鉄道記念日を期して埼玉県さいたま市に「鉄道博物館」が開設された。同館は、JR東日本創立20周年記念事業のメインプロジェクトとして、財団法人東日本鉄道文化財団が建設したものである。

北九州市の「九州鉄道博物館」、大阪市の「交通科学館」、京都市の「梅小路蒸気機関車館」など、鉄道をテーマとする博物館は、国内でもかなりの数を挙げることができるが、この「鉄道博物館」は、そのなかでも最大級の施設である。

開館から10ヵ月近くが経った2008年7月末、博物館実習の一環として、数名の学生とともに同館を訪れる機会を得た。

3つのコンセプト

「鉄道博物館」は3つのコンセプトを持って誕生した。

第1は、鉄道システムの変遷を、鉄道車輌や鉄道に関わる部品等の実物を中心とした展示を行うことで、それぞれの時代背景等を交えながら、産業史として鉄道の歴史を物語る「歴史博物館」であること。

第2は、鉄道の原理・しくみや鉄道に関する技術について、模型やシミュレーション等を活用しながら体験的に学習する「教育博物館」であること。

第3は、日本および世界の鉄道に関わる遺産・資料を体系的に保存し、調査研究を行う「鉄道博物館」であること。

「時空の旅」へ

東京からJR大宮駅へ行き、ニューシャトルに乗り換えて一駅、鉄道博物館（大成）駅で降りれば、そこには鉄道で埋めつくされた夢の空間が広がっていた。

「鉄道博物館」のデザインテーマは「時空の旅」である。近代から現代までの時世と、日本全国で活躍する鉄道のスケールの大きさを表す緩やかにカーブした巨大な屋根は大らかな丘陵と鉄橋をイメージしているという。

メインエントランスへと続くアーケード状のプロムナードにはD51型蒸気機関車の先頭部をはじめ、実際の車輌の台車や輪軸などが展示されている。また、床面には、東北新幹線の大宮駅・上野駅・東京駅・八戸駅それぞれの開業時と、山形新幹線の山形駅・新庄駅開業時、秋田新幹線の秋田駅開業時の時刻表が描かれている。これから鉄道博物館を訪れようとする来館者に期待を膨らませる心憎い演出だと言えよう。

鉄道車輌の宝庫

「鉄道博物館」のメイン展示の1つであり、全体のおよそ半分のスペースを占めるのが、ヒストリーゾーンである。私も入館してすぐ、1階右手に広がるこのゾーンへ足を運んだ。

ここは「日本の鉄道の黎明期」「全国に広がる鉄道網」「特急列車の誕生と通勤輸送の始まり」「大量輸送と電化時代」「全国に広がる特急網」「新幹線の誕生」「鉄道による貨物輸送」「御料車の歴史」の8つのエリアからなり、それぞれの時代やテーマを代表する鉄道車輌35輌のほか、当時の貴重な資料や、実物の車輌を縮小して作った精巧な模型が数多く展示されている。

またここでは、車輌のそばに設けられた階段を下りることで、いくつかの機関車の足回りを観察することができる。ピットで床下から車輪を点検する視点である。

床下から見た蒸気機関車の動輪

それとは逆に、2階のバルコニーからも見下ろすことができるため、普段は目にすることの

できない車輌の屋根部分を観察することが可能となっている。

ターンテーブル上のC57 135号機

かつて蒸気機関車の方向を変えるため、日本国内の主だった機関区にはターンテーブル（転車台）があった。「鉄道博物館」では、ヒストリーゾーンの中央にこのターンテーブルを再現し、その上にC57 135号機を乗せている。

この機関車は、昭和50年12月14日、北海道の室蘭本線で国鉄最後の蒸機牽引旅客列車を牽いた歴史を持っている。

そして1日数回、定められた時刻になると、このターンテーブルが回転し、同時にC57も汽笛を鳴らすのである。

ターンテーブルの上で回転するC57 135号機

幼少のころ、今は亡き母とともに祖父の住む町へ乗っていった列車は、蒸気機関車が牽いていた。少し大きくなり、蒸気機関車が鉄道の主役を次世代の機関車に譲ろうとする時代、私にとっては中学生から高校生にかけてのころであるが、蒸気機関車の魅力に取り付かれた私は、その姿を追い求めて北海道から九州まで駆け巡った。ターンテーブルの上で、圧倒的な音量とともに吹き鳴らされるC57の汽笛は、そうした遠い記憶までも呼び覚ますのであった。

模型鉄道ジオラマ

車輌の下に潜り込んだり、上から眺めたりして堪能したあと、私は2階の模型鉄道ジオラマコーナーへ行ってみた。

このジオラマは、線路総延長が約1400mもあり、線路幅が16.5ミリのHOゲージとしては日本最大の規模を誇る。1日数回実施されるライブ運転では、スタッフによる車輌解説やエピソード紹介とともに、多種多様な列車の走行を

日本最大の模型鉄道ジオラマ

観覧することができる。

また、200㎡の広大なジオラマの中には約3000体に及ぶミニチュアのフィギュアも配置されている。高さ2cmほどの人形ではあるが、これらが並ぶだけで模型の街が生き生きとしてくる。

屋上のパノラマデッキ

地上25mにある屋上のパノラマデッキのすぐそばには新幹線とニューシャトルが走っており、反対側に目を転じると在来線の電車や貨物列車が次々と駆け抜けていく。展示物や模型ではない、今を生きる車輌を目の当たりにすることができるのも、この博物館の大きな特徴である。

パノラマデッキのそばを通過する新幹線。眼下ではパークゾーンのミニ運転列車が駆け回る

鉄道の歴史を学び、鉄道の原理やしくみ、技術を理解した上でこのパノラマデッキに立つと、現役の鉄道車輌が入館する前とは違った感覚で見えてくるから不思議である。

今後の展開

私たちが「鉄道博物館」を訪れたのは夏休み期間中ということもあって、館内は親子連れの来館者で大賑わいであった。

2階のラーニングゾーンでは車輌工作体験のイベントが実施されていたし、人気のSL運転シミュレータは早々に予約で一杯となっていた。開館後初めて迎える夏休みであるため、こうした大盛況は喜ばしいことであるが、今後とも夢を与え続ける「鉄道博物館」であってもらいたい。子どもたちの歓声に包まれる博物館をあとにしながら、私はそんな想いを抱いていた。